

令和4年8月18日

令和3年度 特別の教育課程の実施状況等について

愛媛県		
学校名	管理機関名	設置者の別
新居浜市立多喜浜小学校	新居浜市教育委員会	公立

1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学校名	自己評価結果の 公表ウェブサイト名・URL等	学校関係者評価結果の 公表ウェブサイト名・URL等
新居浜市立多喜浜小学校	新居浜市立多喜浜小学校ウェブサイト https://takahama-e.esnet.ed.jp/page_20210323092619	

2. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

世界で唯一のミニ塩田施設「塩の学習館」を有し、この施設や多喜浜塩田の文化遺産を教育資源として生かし、地域と連携した学習活動を展開することで、持続可能な社会の担い手を育てるため、小学校1年生～6年生において、生活科及び総合的な学習の時間に替えて「海っこタイム」を新設する。「海っこタイム」においては、地域の伝統文化を継承する方々と連携し、地域での見学や瀬戸内沿岸の他地域の塩業との比較、関係者への取材などを通して体験的に多喜浜を見つめられるよう学習を展開した。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

愛媛県新居浜市の東部に位置する多喜浜地域は、江戸時代より瀬戸内の沿岸を活用して広く塩田事業が展開され、昭和半ばまで主要産業の一つとして新居浜市を支えてきた。しかし、昭和40年代に塩田が廃止となって以降、地域住民や関係団体を中心に、塩田文化の保存・継承の取組が進められており、地元の多喜浜小学校でも塩田学習が行われてきたが、十分な体系化が図られているとは言えない。そこで、塩田文化を学ぶことを通じて、海や塩田に親しみ、ふるさと新居浜に関する知識や理解を深め、海洋が持つ恩恵を感じ、豊かな心が育まれるよう、特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性があった。

(3) 特例の適用開始日

令和2年4月1日

(4) 取組の期間

令和4年3月31日まで

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ・計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

- ・コロナ禍で、一部、体験活動の実施が困難であった。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ・実施している
- ・実施していない

<特記事項>

- ・HPや学校だより等で保護者及び地域住民に児童の様子を紹介している。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

多喜浜小学校の教育目標は、「ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな多喜っ子の育成」である。本特例は、多喜浜塩田の文化遺産を教育資源として、塩田の歴史的な意義、地域文化との関わりを学んだ上で、その礎となった恵みとしての海へと段階的に学習活動を展開することで、子どもたちが「海と人の関係」を自分事として実感できる学習が実施されてきた。

こうした学習活動や地域の人々との多様な交流を通じて、子どもたちが地域の良さを実感し、地域の文化遺産を未来に伝えることの意義や方策を学び、海の恵みで発展してきた郷土を誇りに思い、地域の一員としての自覚を育てることで、特例校の教育目標にある目指す子ども像に近付くことができた。今後も、塩田を通じて多角的に学びを発展させることで、身近な海から世界の海へと連続的に視野を広げ、地球温暖化やごみ問題、海洋汚染などの地球規模で起きている問題について、主体的に学び続ける子どもの育成につなげていくことが期待できる。

一方で、課題として挙げられるのは、調べたり体験したりしたことをまとめ伝える場面において、自分の思いや考えを伝える力が不十分なことである。授業のみならず、海洋教育の実践にあたっては、地域の方々や外部機関との連携や協力が不可欠であったことから、積極的に表現力やコミュニケーション能力の育成を図り一層取り組んでいった。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

「海っこタイム」では、地域への誇り、地域の一員としての自覚を育て、持続可能な社会の担い手として自らの将来について展望をもち、様々な状況において主体的に判断・行動し、自立した社会人として生きていくことができる力を総合的に育むことをねらいとしている。

「海っこタイム」で「海に親しみ」「海を知り」「海を守る」「海を利用する」を視点とした授業や活動を充実させることによって、興味・関心をもって、主体的に問題解決に取り組もうとする態度を育てることができた。

令和3年度全国学力・学習状況調査（本校独自に実施）の結果から、「インタビューや取材、メモを取ること等の技能」が身に付いていることがうかがえる。地域の人や学芸員との関わりや聞き取りがこの成果につながっていると推察される。

一方で、児童の様子や調査から課題として感じられるのは、「学んだことや自分の意見を区別して書いたり話したりすること」であった。

5. 課題の改善のための取組の方向性

4に示すような課題を踏まえて、表現力やコミュニケーション能力の向上を図っていく。そのために、児童の学習意欲を高め、主体的に学習に取り組むことができるような環境設定を行っていく。

まず、一人1台端末（タブレット）を、調べ活動やまとめ活動、さらには児童同士の意見交換・情報交換などの場面で積極的に活用し、主体的に、そして友達と対話しながら学習を進められるようにする。

また、国語科における各学年で身に付けるべき表現に関わる技能を明確にして焦点化し、「海っこタイム」における言語活動と結び付けて、支援・指導を行う。そうすることで、より効果的に表現する力が身に付くであろうと考える。

地域や各関係機関との連携の一層の強化に努め、児童が主体的・対話的で深い学びができるように授業改善に取り組みながら、上記の取組を進めていくことで、教育の質の一層の向上につなげていきたい。